

東京芸術見本市 2008 セミナー

◆それぞれの地域においてダンスがどのように役に立つのか ー イギリスのコミュニティダンスを参考に

3月6日(木) 10:00~12:00 / SPACE 6 会議室 A

言語：日本語／英語同時通訳

協賛：ブリティッシュ・カウンシル



スピーカー：クリストファー・パナーマン [ミドルセックス大学 ResCen 所長]

大野典子 [財団法人札幌市芸術文化財団 教育文化会館事業部 事業課 事業係長]

モデレーター：佐東範一 [NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク (JCDN) 代表]

東京芸術見本市 2005 に引き続き、イギリスのコミュニティダンスについて取り上げ、イギリスにおける事例、現地視察報告の紹介、さらに日本においてどのように展開できるかを考えることを目的として行った。

最初に、モデレーターである佐東範一氏から、日本社会のなかでダンス=アートの力を活かしていくためには、ダンスのワークショップやアウトリーチをもっと継続していく為の仕組みづくりが必要で、そのモデルとして、イギリスのコミュニティダンスのあり方が参考になると思った。ブリティッシュ・カウンシルの協力を得て、どのような仕組みでコミュニティダンスが行われているかを知るために、公共ホールの方々と一緒にイギリスに調査に行ったという、今回のセミナーを企画するに至った経緯が話された。

続いて、クリストファー・パナーマン氏からイギリスにおけるコミュニティダンスについて、その発展や社会と関わっている事例についてのプレゼンテーションがあった。

1975年、ロンドンコンテンポラリーダンスシアターが最初にコミュニティにおけるダンスのワークショップを成功させことからアーツ・カウンシルがコミュニティでのダンスワークショップに助成していくこととなる。これと並行して、70年代からダンスの組織に教育またはアウトリーチを専門とする担当者が生まれ、現在ではダンスのプロフェッショナルを養成する学校でも教育やアウトリーチの部分が必須になってきているということであった。

また、ストリートダンスをしている少年の例をDVDで見ながら、ダンスのジャンルを問わずコミュニティダンスは行われているということ、そしてその際に、ダンスに参加する人々が何に興味を持ち、すでにどのような技術を持っているのかなどを考えながら、教えるだけではなくて、参加者と互いに影響しあうというダンスアーティストのあり方が紹介された。

コミュニティダンスとプロフェッショナルのダンスは相互に影響を与えて発展していったが、そのひとつとして、コミュニティダンスのなかで「デヴィエイジング (devising)」と呼ばれる振付の方法についての説明があった。以前ダンス作品を作るときは、振付家がダンサーに「こういう風にして欲しい」と伝え、全ての動きを振付家自身が行って見せながら振付けるという方法であったが、今日では、ほとんど全ての振付家はダンサーが生み出したムーブメントを、構成しながら全体の作品を創っていくという形になっているという。

それはコミュニティダンスの中で生まれた新しいムーブメントが、逆にプロフェッショナルなダンス作品に影響を与えると同時に、そこから新しいダンス作品が生まれるきっかけにもなっているという。



次に、ダンスが社会のなかに入り、多様な社会状況と関係することで、より良い社会環境に変えていく事例に触れた。ダンスと健康という関係においては、保健省（Ministry for Public Health）と文化省（Ministry for Culture）が行政レベルで協働し、国民に向けて、ダンスがいかに健康に良いかというプロモーションを行っている。実際に肥満などの治療の一環として、ダンスのクラスを無料で受けることもできるようになっている。

また別の例では、学校をドロップアウトした若い人たちが犯罪に手を染めるケースも多く、こうした若者たちへも、独自のダンスプログラムを実施しているカンパニーがあるということであった。さらに、多民族が生活するイギリスでは、多言語が話されている学校が多い。ロンドンの学校では 20 以上もの言語が話されていることが珍しくなく、さまざまな民族コミュニティに対しても相互のコミュニケーションを図るためにダンスが有効に使われている。

このように、社会における様々なコミュニティにダンスが関わることで、ダンスによって社会がつながっている姿をイギリスのコミュニティダンスの活動によって知ることができた。

パナーマン氏のプレゼンテーションの最後に、参加者を 3~4 人のグループに分け、10 分間で、日本においてコミュニティダンスを行おうとしたときに、その発展を妨げると思われる問題・障害を 1 つ、解決法 1 つを出すためにそれぞれのグループで話しあった。話し合いの後の発表では、問題・障害として、「違う人種間でコミュニケーションを取ることが日本ではない」「恥ずかしい気持ちがある」「指導者であるアーティストにコミュニティダンスの経験があるアーティストが少ない」ということ、この問題・障害を解決する方法として、「ダンスをすることが恥ずかしいものではないという認識を持つためにみんなが一度はダンスを経験する」や「コミュニティダンスとアーティストをつなぐ人の不在。つなぐ仕組み・方策を考えること」などの意見が出た。

その後、大野典子氏から 2007 年 6 月に行ったイギリスのコミュニティダンスの施設を視察して感じた印象をうかがった。

視察を通して最も驚いたのはシステムが整備されているということ。行政と距離を持って、分野の違うそれぞれの組織に資金を分配できるアーツ・カウンシルの存在やナショナルダンスエージェンシー（以下、エージェンシー）、教育機関、カンパニーがそれぞれの特色を生かした活動を行うことで、互いの活動をカバーしている印象を持った。中でも、ダンスと人をつなぐ組織であるエージェンシーの活動が新鮮で、劇場を持たず事務所だけというエージェンシーもある。つまり、劇場がないことがデメリットにならず、むしろコミュニティに基盤を置き、ともに活動をしていく場合、メリットとも考えられている。

訪問先の 1 つであるイーストロンドンのエージェンシーでは、この地域が多民族の住む貧しい地域で、差別を解消するためにダンスの力を使っている。ちょうど 2012 年のオリンピック予定地の近くであり、誘致をするにあたってダンスによっていかに若者が希望を得たか、活力を得て暮らしたかというイメージを戦略として使っているということであった。

自分たちの地域を 50 年後にどのような地域にしたいのか、自分たちの劇場がコミュニティの人たちの集まる場となっているか、を考える上で、コミュニティダンスの活動、そしてエージェンシーという組織のあり方は大変参考になる事例である。スペースを持っていることを最大限に活かすことで、公共ホールがエージェンシーになれる可能性を秘めているのではないかという報告であった。

（東京芸術見本市事務局発行「東京芸術見本市 2008／インターナショナル・ショーケース 2008 開催報告書」より転載）

